



石牟礼道子の世界

—事実・表現・想像力—

講師◎米本浩二さん

『評伝 石牟礼道子—渚に立つひと—』の著者

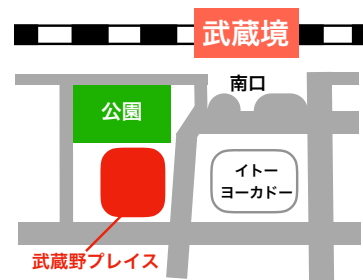
日時 | 2019年10月13日(日) 午後2時-4時

会場 | 武蔵野プレイス4階 フォーラム A&B

(定員100名、先着順)

東京都武蔵野市境南町2-3-18 ☎0422-30-1903

JR中央線「武蔵境」駅南口から徒歩1分



参加費 | 1,000円

『苦海浄土』出版から50年。石牟礼道子は何を問いつづけたのか。
没後1年余。生前最も信頼されていたジャーナリストが、
石牟礼の人間像とその知られざる魅力を語る。



「生まれてすみません」とは太宰治の有名な言葉ですが、石牟礼道子さんも「生まれてすみません」と言わんばかりに、ごちなく不器用にこの世を生きた人でした。

邪念と痛苦のこの世界で、再三の自殺未遂をへて、自らの孤独に見合う孤絶を水俣病患者に見出します。患者を救済する前に自分を救済しなければならなかった。

患者を書くことで、生の回路を開きます。前近代と近代、生と死、この世ともうひとつのこの世、のはざまに立ち、水際立った言葉を紡いでいきます。

代表作『苦海浄土』の主要登場人物の「ゆき女」や「杵太郎の祖父」の語りに注目し、フィクションとノンフィクションの本来の意味を考察しつつ、石牟礼文学の深奥に分け入ります。

(講師・米本浩二さんからのメッセージ)

■米本浩二(よねもと・こうじ)

1961年、徳島県生まれ。徳島県庁正職員を経て早稲田大学教育学部英語英文学科卒業。在学中に『早稲田文学』を編集。現在、毎日新聞記者。石牟礼道子を長期に取材。現在も石牟礼道子資料保存会研究員として石牟礼文学の調査、研究を続ける。毎日新聞西部本社版で連載した「不知火のほとりで 石牟礼道子の世界」は、2014年から2019年までの5年間におよび、70回で完結した。2018年、『評伝 石牟礼道子—渚に立つひと—』(新潮社)で第69回読売文学賞を受賞。記者として取材をする一方で、常に石牟礼道子の身近で渾身介護をし、最期まで寄り添い対話を重ねた。今年6月には、受賞作の続編として、石牟礼道子逝去までの35日間におよぶ日々を詳述した『不知火のほとりで 石牟礼道子終焉記』(毎日新聞出版)を刊行。

■石牟礼道子(1927-2018)の主な著作:『苦海浄土—わが水俣病』(講談社1969、講談社文庫〔新装版〕2004)、『苦海浄土全三部』(藤原書店2016)、『樺の海の記』(朝日新聞社1977、河出文庫2013)、『石牟礼道子全句集 泣きなが原』(解説・黒田杏子、藤原書店2015)、『石牟礼道子全集・不知火』全17巻+別巻(藤原書店2004-14)、池澤夏樹個人編集『世界文学全集』全30巻・Ⅲ-4「苦海浄土」(河出書房新社2011)、同前『日本文学全集』全30巻・24「石牟礼道子」(同前2015)